

三 金 井 中

倉吉博物館

前田寛治を想う

中井金三

前田寛治君の顕彰のことが、郷土において、県並びに有志の方々の賛助によって挙行されるに至ったことは、誠に慶賀にたえないことである。

鳥取県の生んだ前田寛治君が大正・昭和時代を代表する画家であることは、今更申述べる迄もないが、かかる巨匠も、郷土にては予言者故郷に容れられずというたとえにもれず、一部の人の外には案外知られていない。文化は等閑に附せられる場合が多いからであろう。前田君の美術院賞の栄誉には関心はあっても、彼の芸術を理解し、それによって人間生活を拡充するといった真の鑑賞者は至って少ない。前田君の芸術上の業績は実に偉大であり、民族の遺産として永く末代迄伝えるべきものである。この意味において、今回の顕彰の挙は時宜を得たものとして敬意を捧げたい。

画業については、各種の冊子の中にいろいろ評論されているから、私としては、芸術鑑賞を離れて、前田君と私との関係や彼の生い立ち人柄について申述べたいと思う。

前田君は倉吉中学第三回（大正三年）の卒業生で、読書好きの文学青年だったように記憶している。

同君は、中学卒業後、拙宅を訪ねて、美術学校志望についての自分の考えを私にうちあけた。

この時持参した絵をみると、洋風の絵を習ったことがないので、手法も知らぬ幼稚な絵であった。私は当時の英国の風潮や日本の世相を思い職業として画家をえらぶことに余り気がすまなかったので、一度は思い止まるよう勧告をした。然し、彼の語るところをきくと、頭脳明晰で意志の強固なことがわかってきたので、拙宅で入学準備のためのデッサンのけいこをすることを許した。熱心に石膏写生をすること約一年にして技大いに進んだが、設備や材料の乏しい当地ではこれ以上の修練の困難なことを告げ、上京して研究所入りをすることをすすめた。

翌春、美校へ入学したが、彼の決意と所信は物凄く、芸術の殿堂は厳かで恐ろしくもあるが中に入って真実をつかみたい、という意味の事を語っていた。入学後は、驚嘆すべき勉強ぶりであった。私も多数の画家に知り合いがあるが、彼程の勉強ぶりを発揮したものは他に見出せない。毎年暑中休暇には、一年間に描いた二十五号以上の作品六十枚を拙宅に運びこみ、私の批評を乞うた。このことは卒業まで五年間続いた。その作品たるや、学校における実技練習のものではなく、課外の作品であった。

大作六十枚といえ、彼は週に一枚以上画いたことになる。しかも、これは学校以外の労作である。いかに体力に恵まれたとはいえ、常人の企て及ぶところではない。

美校卒業の後は、所謂就職を求めず、純正美術作家として世に立ちたいことが彼の願望であった。私も彼の望みの正しきことを語り、私の如く環境に支配されることを戒めた。

彼は仏蘭西留学を志し、母校倉吉中学校に後援会をつくりその資金を得んとしたが、会員二人を得ただけで失敗に終わった。彼は遂に意を決し、自ら有力者を説きまわって資金を獲得せんと志した。私は彼を伴って各有力者を訪ね歩いたが、彼が渡欧の熱意をひれきして後援方を依頼した真摯な姿は、今もありありと眼底に残っている。夏の暑い日盛りに、田畑のあぜ道をたどりながらやっと訪ね当てた家でも、心よくうけいれてくれる人ばかりではなかった。そんな時「先生すみません」と云って頭を垂れる彼の瞳からは、涙さえ光ってみえた。

後援会は東京と倉吉の二ヶ所にでき、彼は仏蘭西に向ってかしまだちすることができた。

巴里からの通信に、自分はこの半年間で西洋美術史の研究を一応完了した。自分の行くべき道は拓けた。巴里滞在の日本留学生の多くは仏蘭西の新しいイズムを追うことを急ぎ、これを日本に持ち帰り、新人として流行に魁をし名声を揚げることを努めているが、自分は独自の研究を深め写実主義の根元にかえりクールベエを起点として研究を始めている。と記してあった。私はこの見識の中に彼の大成を予想して、いまさらに感激の深きものがあつた。

世相は挙げてマッス・コミュニケーションの時代である。一犬吠ゆればわれもわれもと吠えつづける。マス・コミに一さいの生活と思想が支配されたとき、創造性と自主性とは失われてしまう。前田君はオリジナルな考え方で行動し、時流におもねることなく、附和雷同することもなかった。

この見識の上に立って批判と反省をおこたらず、そのためにこそ指導的画業を完成するに至ったのである。彼の主張する新写実主義は、単なる物の外面説明ではなく、真実の追求であり、精神的な写実である。

大正十二年の東京大震災は、巴里滞在中の前田君に甚大な衝激を与えた。後援会からの送金は止った。彼の苦衷を訴えた手紙が、私の手許に届いたのは、翌年三月十日頃であった。前田君の兄秀三氏を訪ねると、一家挙って憂慮の中にあり、老祖母は、寛治はもう巴里で死んでおります。と泣いておられた。秀三氏の苦衷も察するに余りあるものがあつた。幸い桑田氏の好意による協力もあって送金することができ、巴里には電報為替で二十五日で着いた。こんな事情から、前田君の巴里滞在は、予定を変更し数カ月の後に帰国することになった。

帰朝後のわが美術界に於ける彼の活躍については、他に記述もあることであろうから私はこれを省略するが、天才といい偉人とよばれる人々の苦難の中に生い立つ事實は、前田君の場合も例外ではなかったわけである。

前田寛治と砂丘社との関係について云えば、大正四年拙宅で前田君がデッサンを始めた頃から、芸術愛好者のグループができた。中学卒業生・在校生の集りで、昼は絵を描き、夜は芸術談議に花を咲かせた。二銭づつ出し合って焼芋を買い、一枚の蒲団に皆の足をいれながら夜を徹して談論した。このグループが砂丘社のおこりで、創立はたしか大正九年の頃であつたとおもう。四十年の昔に芸術運動・文化運動ののろしをあげたのだから、意気軒昂なものがあり、それから今日まで続いているのだから珍らしい。会員としては河本緑石・前田寛治・増田英一・前田利三・石亀忠利・湯浅光男・亀井政之助などがその主なるもので、私がもちろん最年長者であつた。絵画研究と観賞・文芸・音楽など広い部門にわたり、毎月廻覧雑誌を出して氣勢をあげた。この仲間、会長もなく、各人の人格を認めて、談合終れば直ちに計画に向つて行動をおこした。展覧会は大正九年に第一回を開いたが、持ち寄つた作品は熱意のこもつた大作ばかりで、今の時代に劣らぬものであつた。当時は、文化運動などには、一般に関心も乏しく、補助金なども全くなかつた。前田君と私が、扇と団扇に絵を描き、入場者に十銭で頒ち、観覧者を集めるようなこともあつた。波田野幸治君が朝鮮より帰国して会員となり、長谷川富三郎君がこれに加わり、有能の士を得てその活動力は倍加するに至つた。前田君は帰朝後東京で、里見・佐伯・中山等と一九三〇年協会を組織したが、その会員諸氏の作品を砂丘社展に送つて壁面を飾つたりした。砂丘社の運動は目覚しく活発となり、美術・文学はいうにおよばず、中央から有名楽人を招いて音楽会を催した。石井漠舞踊会を催したり、トーキー映画を紹介したりした。

前田君は砂丘社創立当時の一員でもあるが、砂丘社の運動にはいつも熱心で、労を厭わなかつた。帰朝後も砂丘社主催のもとに度々開かれた絵画講習会に、彼の蘊蓄を披瀝して後進を教導した。その恩恵に浴した人は県下に数多いことであろう。有名になつてからも、写生会に加わつたり、作品を提供して、熱意のほどを示した。

前田氏逝つて三十年、その顕彰会が県民多数によつてもたれることになり、故人を偲ぶ情切なるもの覚え、この稿を記す。

※「前田寛治の芸術」・前田寛治顕彰会編・昭和35年
(原文のまま掲載・文責前田学芸員補)

西歴	年号	中井金三 年譜	日本美術史(洋画)概略年譜	日本史概略年譜
1883	明治16年	8月20日倉吉市(旧東伯郡小鴨村)中河原の酒造家中井喜七郎の次男として生まれる。		○ 鹿鳴館完成
1885	明治18年			○ 内閣制度発足
1886	明治19年		○ 原田直次郎「くつやのおやじ」(滞独作)	
1889	明治22年		2月東京美術学校開校 6月明治美術会創立(浅井忠・小山正太郎) ○ 浅井忠「収穫」(明治美術会展)	○ 帝国憲法発布
1892	明治25年		○ 黒田清輝「読書」(滞仏作)	
1893	明治26年		4月明治美術会展に印象派作品を展覧。 7月黒田清輝、ラファエル・コランの指導を受け帰国。	
1894	明治27年			○ 日清戦争(—1895)
1896	明治 29年		6月白馬会創立(黒田清輝・藤島武二) 7月東京美術学校に西洋画科新設	
1897	明治30年	○ 上京、倫理学者杉浦重剛の称好塾の門下生となる。	○ 和田英作「渡頭の夕暮」(白馬会)	
1901	明治34年		○ 赤松麟作「夜汽車」(白馬会展) 11月太平洋画会結成(満谷国四郎ら)	
1902	明治35年		○ 藤島武二「天平の面影」(白馬会展)	○ 日英同盟
1903	明治36年	3月私立日本中学(現日本学園、世田谷区所在)卒業。 ○ 在学中、真野紀太郎に絵の指導を受ける。		
1904	明治37年	○ 白馬会研究所で、和田英作・湯浅一郎につき木炭デッサンを修業。	○ 青木繁「海の幸」(白馬会展)	○ 日露戦争(—1905)
1905	明治38年	4月東京美術学校西洋画科へ入学。同級に田辺至・藤田嗣治・香田勝太等がいて、黒田清輝の指導を受ける。		
1907	明治40年		10月文部省美術展覧会(文展)開設 ○ 和田三造「南風」(文展)	○ 経済恐慌

西歴	年号	中井金三 年譜	日本美術史(洋画)概略年譜	日本史概略年譜
1909	明治42年	6月～9月竹島に渡航して、「アシカ狩り」「竹島風景」を制作。 ○ 河本しょうと結婚。 ○ 在学中、白馬会展に出品。		
1910	明治43年	3月同校本科卒。卒業制作「河岸」「自画像」 ○ 家業の倒産により帰郷	○ 「白樺」創刊、ロダンを紹介	○ 韓国併合 ○ 大逆事件
1911	明治44年			○ 条約改正完了
1912	大正元年		○ フェーザン会結成(岸田劉生・木村莊八・高村光太郎ら)	○ 第一次憲政擁護運動
1913	大正2年	12月2日県立倉吉中学校(現倉吉東高校)に書記兼助教諭心得として赴任	○ 梅原竜三郎「ナルシス」	
1914	大正3年	3月～10月頃、前田寛治に木炭デッサンを自宅で指導。	10月二科会創立	○ 第一次世界大戦参加
1915	大正4年		○ 村山槐多「カンナと少女」(院展) ○ 草土社結成(岸田劉生・木村莊八)	
1916	大正5年			○ 吉野作造「民本主義」を提唱
1917	大正6年		○ 万鉄五郎「もたれて立つ人」(二科)	
1918	大正7年		○ 関根正二「信仰の悲しみ」(二科)	○ 米騒動 ○ シベリア出兵(一1922)
1919	大正8年		○ 帝国美術院展覧会(帝展)開設	
1920	大正9年	4月砂丘社創立、地方文化に貢献。 増田英一・河本緑石・石亀忠利・亀井政之助・前田利三・前田寛治らと共に ○ 第1回砂丘社展	○ 中村彝「エロシエンコ氏の像」	○ 国際連盟加入
1921	大正10年	10月県立倉吉高等女学校(現倉吉西高校)教諭心得兼務。 ○ 第2回砂丘社展、前田寛治を中心に	3月大原コレクション公開(倉敷にて) ○ 岸田劉生「麗子微笑」	
1922	大正11年	○ 前田寛治渡仏のために画会を創ったり、後援の依頼をして資金捻出に全面的協力。	○ 春陽会結成(梅原竜三郎・小杉未醒) 10月アクション結成(中川紀元・古賀春江)	
1923	大正12年	○ 第3回砂丘社展	7月マヴォ結成(柳瀬正夢ら)	○ 関東大震災

西歴	年号	中井金三 年譜	日本美術史(洋画)概略年譜	日本史概略年譜
1923	大正12年	○ 砂丘社主催講演会を催す。 10月同人誌「砂丘」を発刊 ○ 第4回砂丘社展		
1924	大正13年	7月倉中・倉女の兼任教諭となる。	○ 三科造形美術協会結成	○ 第二次憲政擁護運動
1925	大正14年	○ 前田寛治による油絵講習会(砂丘社)	○ 国画会洋画部結成	○ 普通選挙法 ○ 治安維持法公布
1926	昭和元年	○ 第5回砂丘社展 ○ 浜田重雄・川上貞夫・恩田孝徳ら鳥取より砂丘社に加入。	5月1930年協会創立(前田寛治・佐伯祐三ら) ○ 東郷青児「サンタルバンク」(二科)	
1927	昭和2年	5月昭和2年度県視学委員(図画科)を任命される ○ 第6回砂丘社展、1930年協会より賛助出品 ○ 西条八十講演会(砂丘社)	○ 佐伯祐三「ルクサンプール」(二科)	○ 金融恐慌
1928	昭和3年	東京グラブノフ音楽団を招請(砂丘社)	○ 前田寛治「裸体」(帝展)	
1929	昭和4年	○ 永井郁子・石井莫舞踊団・東京松竹音劇郎等を招請し公演。(砂丘社)	○ プロレタリア美術家同盟結成。 ○ 古賀春江「海」・国吉康雄「秋のたそがれ」(二科)	
1930	昭和5年	6月前田寛治追悼講演会(砂丘社)	○ 小出檐重「ソファアの裸女」(二科) 11月独立美術協会結成	
1931	昭和6年	○ 石井莫舞踊団、再度招請。(砂丘社)	○ 三岸好太郎「馬に乗る道化」(独立)	○ 満州事変
1932	昭和7年	○ 第7回砂丘社展 ○ 加藤朝鳥歓迎座談会(砂丘社)	5月東光会結成(高間愼七ら) 10月満谷国四郎「緋毛氈」(帝展)	
1933	昭和8年	○ 第8回砂丘社展		○ 国際連盟脱退
1934	昭和9年	○ 第9回砂丘社展	○ 安井曾太郎「金容」(二科) ○ 林武「ラ・コアビュース」	
1935	昭和10年	○ 願いに依り倉中・倉女の囑託となる。 ○ 画室を建て意欲的に制作		
1936	昭和11年		6月帝展を新文展に改組 7月新制作派協会結成(小磯良平ら) 12月一水会結成(安井曾太郎・山下新太郎)	○ 二・二六事件
1937	昭和12年		2月自由美術家協会結成。 7月第1回展、長谷川三郎「チヨウの軌跡」	○ 日華事変 ○ 日独伊防共協定

西歴	年号	中井金三 年譜	日本美術史(洋画)概略年譜	日本史概略年譜
1940	昭和15年		10月皇紀 2,600年奉祝展、藤田嗣治「ドルドーニュの家」梅原竜三郎「紫禁城」○ 松本娉介「茶の風景」 雲光「馬」	
1941	昭和16年			○ 太平洋戦争(ー1945)
1943	昭和18年		4月日本美術報国会結成	
1944	昭和19年		9月美術展覧会要綱を發布(公募展の禁止)	
1945	昭和20年		11月行動美術協会結成	○ ボツダム宣言受諾
1946	昭和21年	○ 退職 ○ パラと共に自適の生活を過ごす。	3月日本美術展覧会(日展)を開催	○ 日本国憲法発布
1947	昭和22年		4月二紀会創立	
1949	昭和24年		2月第1回アンデパンダン展	
1950	昭和25年		9月モダンアート協会結成(山口薫ら)	
1951	昭和26年		9月新制作協会結成(新制作派と創造美術合同) ○ 岡鹿之介「遊蝶花」(日展) ○ サンパウロ・ビエンナーレに日本も参加。(これ以後各国のビエンナーレに出品)	○ サンフランシスコ平和条約調印
1953	昭和28年		○ 坂本繁二郎「水より上る馬」(昭29年度毎日美術賞)	
1954	昭和29年		○ 山口長男「かたち」(現代日本美術展)	
1955	昭和30年		○ 岡田謙三「ソフトビーム」(ヴェネチャ・ビエンナーレ)	
1956	昭和31年		○ 安井賞設定	○ 国連加盟
1960	昭和35年		○ 前田常作「人間のいる風景」(第1回アジア青年美術家展)	○ 日米新安保条約調印、反対闘争激化。
1962	昭和39年		○ 斉藤義重「青」	○ 第18回オリンピック、東京で開催
1967	昭和42年		3月文化財指定の対象に、明治期洋風画を含め、新たに浅井忠らの作品を重文に指定。	○ 公害対策基本法成立
1968	昭和43年	12月18日信生病院に入院		○ 小笠原諸島アメリカより返還
1969	昭和44年	2月9日長逝85才		○ 大学紛争激化

中井金三

昭和50年9月

倉吉博物館

倉吉市仲ノ町3445-8

印刷・倉吉市越中町(有)山本印刷

昭和53.11.24

島根県総務課
竹島資料室
08.10.14
NO. 306

